教皇ベネディクト16世の母国訪問を酷評したドイツのマスコミと信徒の使命

Atsuko Lenarz
ドイツOffenbach am Main在住

筆者は本誌63号の誌上「偏向報道で歪められた教会の名誉回復を願って」でドイツの教会現状を報告した折に、「カトリック教会最高の地位にある自国民ベネディクト16世をこれほどまでに過酷に扱う国も珍しいであろう。」と書いた。またフランクフルトなどヘッセン州の諸地域を管轄するリンブルクのテバルツ・ファン・
エルスト司教は今年6月に、「真実をこれだけ透明に判り易く語る教皇に対して、ドイツの社会はなぜこれほどまでに非難攻撃を繰り返すのでしょうか？　私は同国人として情けなく思います。」と述べた。教会と教皇に忠実であろうとする信徒は、今年9月22日から25日迄、なつかしい母国ドイツを訪問した教皇ベネディクト16世を巡るマスコミの対応を見て、この司教の発言に大いに共鳴したことであろう。

教皇のドイツ訪問は、2005年8月ケルンの世界青年祭、翌年9月の郷里バイエルンの諸都市訪問に次いで3度目であるが、今回はヴルフ大統領の招待で国賓としての公式訪問であった。訪問先としては首都ベルリン、旧東ドイツ地域のエアフルト及びその近郊、最後にバーデン・ヴュルテンベルク州の古都フライブルクが選ばれた。「神がいる所に将来がある。」をモットーに僅か4日の滞在中に教皇は、84歳の高齢ながら17回に及ぶ説教、講演、他の教派や宗教団体との面談という数分刻みの強行スケジュールを全く隙のない態度で予定通りにこなし、疲労の影すら見せなかったことに各方面から感嘆の声が上がったのは言うまでもない。ドイツ社会の再キリスト教化を真剣に呼びかけた教皇の声に率直に耳を傾けた司祭や信徒は、希望と勇気に沸き立ち、深い喜びに満ち溢れた。各会場には、自国の国旗を振って馳せ参じたポーランド、チェコ、スロヴァキア、フランス、スイスなど近隣諸国からの信徒も多く、カトリック教会の普遍性を示すに相応しい光景が

展開された。日頃教会と疎遠になっていた信徒の中にも教皇の来訪で信仰を一新した人々は多かった。

しかしこれに比してドイツのマスコミの反応は余りにも冷たく、信徒の神経を逆なでするような意地の悪い論評に終始し、中には教皇に対する個人攻撃や罵倒に近い論評や投書すら見られた。昨年 9 月に教皇がイギリスを訪問された折も、同国の雰囲気は刺々しく冷たかったが、強い信仰と自覚に溢れた教皇の講話をまがりなりにも聞き、その暖かく謙虚な立ち振舞いが紹介されると世論は一転して、教皇に敬意の念すら込めた好意的な論調へと変って行った。しかし教皇の祖国ドイツのマスコミは最後まで容赦なく教皇を非難攻撃したのである。この 4 日間に及ぶマスコミの教皇報道を通して筆者が痛感したのは、荒涼とした現代ドイツの精神風土と、自由を名目に勢力を増長させる不寛容の精神である。

世俗主義と非キリスト教化の波が果てしなくうねる現実を前にして、カトリック司教団が「ドイツはキリスト教国からもはやキリスト教の布教対象国-Missionsland-に変じた。」と言明してから既に久しい。司教団の発表によると、昨年 2010 年にカトリック教会に離脱届けを出したのは 181.193 人で、その数はプロテスタント教会の離脱者を凌ぐという前例のない事態を迎えた。63 号で紹介した通り、昨年になって発覚した諸々の司祭による過去数十年に及んだ青少年に対する性的暴行事件は社会に強い衝撃を与え、これが導火線となって多数の信徒の教会離脱に決定的な拍車をかけた。統計の上ではカトリック信徒は 24,65Millionen 人であり、宗教団体の会員数としてはいまだにドイツ最大の数である。しかしこのような数だけをあてにして、教会が現在と将来を楽観視することは全く禁物である。司教団の発表によれば、
ミサなどに定期的に出席する率は低下の一途を辿り、2010 年には全カトリック信徒の 12.6%にまで落ち込み、件数の減少する洗礼は 170.339 件であったのに対して葬儀のみが 253.000 件と増加しているのである。洗礼と冠婚葬祭を除けば教会とは無縁になった信徒の多くが、次々と教会に離脱届けを出す状況は増大する一方である。

ところがドイツの教会の悲劇は、多くの信徒、更には一部の司祭や司教までもが教会停滞の原因を全て教皇の責任に転嫁し、自

らを反省する姿勢が殆ど見られないことである。その最前線に立つのが信徒団体として最大を誇るドイツ・カトリック中央委員会（略称 ZdK）である。その傘下の「カトリック婦人同盟」「カトリック青年同盟」、さらには「我らは教会」などの諸団体は、教会の改革と民主化、開かれた教会などと称して、「司祭独身制の廃止」「女性司祭の登用」「信徒による司教選出」「同性愛者の教会結婚祝福」「プロテスタント教会との早期一致」などの要求のみを慢性的に振りかざし、マスコミからは教会の民主化運動として大いに歓迎されている。この種の団体のみが新聞やテレビなどで「硬直した教会の改革を望む信徒の声」として一方的に紹介されるために、教会と教皇に忠実に従い、精神的な刷新と内部の綱紀粛正を通して教会の活性化を図ろうとする信徒が片隅に追いやられ、苦戦を余儀なくされていることついて、筆者は本誌で度々報告してきた。9 月 15 日付 Frankfurter Allgemeine 紙によると、環境政党として票を伸ばしている緑の党の女性議員兼プロテスタント教会の役員カタリン・G.エッカルトは「教皇はカトリック教会の性道徳イデオロギーのために、同性愛者が深く傷つけられていることを思い知るべきです。」と述べた。この発言は、同性愛者という社会の少数者の権利のみを一方的に尊重し、批判者を差別主義者呼ばわりする現代社会の風潮を代弁するものであろう。これに対して筆者は、「緑の党や左派政党の反カトリック教会、反教皇感情が教会内にまで浸透しているために、真面目な司祭や信徒がどれほど深く傷つけられているのか、知ってほしい。」と言いたい思いである。

　このようにカトリック教会に対する風当たりが厳しいドイツ社会は、決して教皇ベネディクト 16 世を歓迎する雰囲気であったとは言えなかった。教皇の来独が近づくと、「ヴァティカンの闇」「絶対権力を揮う教皇」などのタイトルで偏見と歴史的知識の欠如をさらけ出すようなテレビ番組が毎日のように放映され、ドイツの代表週刊誌 Spiegel38 号（9 月 19 日付）は、「世論に耳を貸さない教皇」との見出しで
カトリック信徒の教会離脱の最高責任者としてベネディクト 16 世を譴責する大々的な事を発表した。また公共テレビの司会者はベネディクト 16 世を「超保守主義者」と呼び、テレビニュースで街頭インタビューに応じたベルリンのあるカトリック信徒の女性は、「司祭の結婚を認めないような非人道的な教皇を歓迎するつもり

はありません。」と冷たい反応を示した。教皇を待ち望み、その説教を早く聞きたいと期待している信徒など存在しない、と言いたげな報道ばかりであった。

さて教皇は 9 月 22 日定刻通り 10 時 18 分にベルリンのテーゲル空港に到着した。この日は朝早から報道陣が飛行場に詰めかけ、テレビ中継放送が行なわれた。しかし到着前の時間を利用したテレビ討論会に出演したのは、教会・教皇批判で知られるカトリック・ジャーナリスト、プロテスタント教会の関係者、教会評論家のみであり、肝心のカトリック教会関係者はいなかった。「教皇から何を期待しますか？」との問いに対して彼等の答えは一様に「教皇は、司祭独身制の廃止、女性司祭の登用、信徒による司教選出、同性愛者の教会結婚式を認め、教会一致を望むカトリック及びプロテスタント信徒の声を聞き入れ、現代社会に歩調を合わせるべきだ。」ということだけであった。やがて教皇が姿を現した瞬間に女性アナウンサーは、「カトリック教会は女性の進出を一切認めていません。」と前置きし、あたかも差別の張本人がドイツにやって来た、とでも言いたげな報道であった。そこには全世界のカトリック教会の長たる教皇が自分達の国ドイツから出たことの喜び、誇り、感謝の念などはひとかけらも感じられなかった。

ウルフ大統領とメルケル首相の出迎えを受けた教皇は、挨拶の中でドイツ社会の健全な発展のために神への信仰と信頼がいかに大切であるのかについて述べたが、この点を力説することこそが教皇の祖国訪問の悲願だったことは、マスコミ関係者にも大半のドイツ人にとっても全く関心がなかったようである。

この日の午後、ベルリンのドイツ連邦議会で教皇の講話が行なわれた。しかし
教皇の訪問が近くなった時に教皇ボーイコット運動を展開したのは、ドイツ最大の野党、社会民主党（SPD）の議員ロルフ・シュワーニッツ氏である。同氏は教皇の議会演説は、政教分離を規定した憲法に違反する行為であると主張したのみならず、「キリスト教を世界に強制する教皇は、人類抑圧、搾取など悲惨な状況に追い込む悪の元凶である。」という声明まで出したのである①。全議員数 620 人の内、教皇ボーイコットの呼びかけに応じたのは、社会民主党の一部や左翼政党、緑の党の議員数人など約 80 人であ

った。左翼政党のある女性議員は、「教皇の説教は、現代の自由社会の規範と一致しません。そんな人物の言うことなど聞く必要は一切ありません。」と言って嫌悪感を露骨に示した。しかしこのような議員に対しては、
やがて党内からも批判の声が上がってきた。左翼政党や緑の党の姿勢は、反宗教に徹しているが、それでも人間としての常識を持ち合わせた幹部の多くは、教皇の演説に興味を示したことは、銘記しておきたい。
　ドイツ連邦議会前の広場には「ラッツィンガーを倒せ！」「教皇は地獄に行け！」等の低劣な言葉を書き連ねた看板が乱立する中、議会に登場した教皇は満場の拍手に迎えられた。この日の演説は一番注目されていたものである。教皇はヨーロッパの危機と現実を精神面から考察し、民主的政治を行なう場合の根本精神を説き、信仰と理性、権利の尊重がヨーロッパの支柱であること、自由と神の前での責任、人間の尊厳性は不可侵であること、政治家は自己の野心と成功を求めるのではなく、政治倫理に基づいて不正に対抗して平和への努力に献身するべきであることなどを
力説した②。これは醜い政党争いに奔走して信頼を失った現在のドイツの政界に対する強い警告の声であったと言えよう。
　演説の終了後、議員一同総立ちで拍手。与野党議員の多くは、教皇の高い知性に磨かれた演説、確信に満ちた態度に感服したことを率直に述べた。日頃、教皇を差別主義者として公然と敵視していた緑の党の幹事長すら、「教皇と理性的な意見交換をしたい。」と本音を表明したほどである。
　この時、外では左翼系政党、同性愛者同盟、フェミニスト集団を中心に約 15.000 人が集まって反教皇デモを繰り広げ、人権擁護運動で活躍するアムネスティ・インターナショナルまでがここに顔を連ねていた。同性愛者の結婚を祝福しない教会の態度は、人権抑圧であるというのがアムネスティの言い分である。このようなアムネスティ・インターナショナルの人権路線に疑問を抱き、最近はここから脱退するカトリック信徒の会員も多いそうである。
　教皇自身は、ドイツに向う機内インタビューで「世俗的な現代の民主社会で、
デモなどを通じて自分達の意見を主張するのは、当然の権利でしょう。私はその人々にも敬意を払います。」と発言し、同時に世論を沸騰させた聖職者による一連の青少年への性暴力事件を機に、教会離脱者が激増したことにも触れて、教会の名誉を汚した聖職

者には厳しい処置を取ることを言明することも忘れなかった。しかしこのような発言は、マスコミ陣により完全に無視された。彼らは「教皇は意見の独裁者」との先入観に固執し、このイメージを壊したくないのであろう。

議会演説の後、教皇はベルリン市内のイスラム教徒協会とユダヤ人協会を訪問し、夜はベルリンのオリンピック会場で 7000 人ほどが集まりミサを司式した。ここで教皇は世俗主義の渦巻く社会に生きる教会の役割と重要性、社会の少数者としての責任と意義を自覚するように参列者に訴えかけた③。ミサは説教の後、カトリック教会の国際性、普遍性を意識させる意向でラテン語で行なわれた。参加者は各国の国境を越えて存在するカトリック教会の存在意義を再認識したに違いない。ここで見た信徒の喜びと熱気は、8 月にマドリッドで開催された世界青年祭での光景を思い出させるものであった。

翌 9 月 23 日の訪問先はエアフルトであった。教皇が旧東ドイツ地域を訪れるのは全く初めてのことである。ここで注目されたのは、マルティン・ルターが修道誓願を立てた旧修道院聖堂においてプロテスタント教会の主流であるドイツ福音教会（Evangelische Kirche in Detuschland 略称 EKD)の代表シュナイダー牧師と信徒を前に行なった講話である。プロテスタント教会はカトリック教会との「共同の聖体拝領」の実現を求め、「聖体」「聖餐」などの語が意味するように解釈の相違から彼らの要求に応じないカトリック教会を厳しく批判してきた。そのために教皇のプロテスタント教会訪問が発表された時に、両宗派による「共同聖餐（聖体）」が実現されるのではないか、と期待する声は異常なまでに高まっていた。しかし教皇は、本件を巡る両教会の相違は大きく、単なる感情論に押されて見解の相違を曖昧にしたまま強行する共同（聖体）聖餐は、両教会にとってむしろ有害であること、信仰は政治的交渉による妥協や条約取決めのようにして決めるものではないことを断言すると同時に、カトリック信徒とプロテスタント信徒は共通の神のもとで結ばれており、教会分裂の悲劇を乗り越えて、相互に助け合い、生きた信仰を深めることの方が見解の相違を巡って論争したり、安易な妥協で本筋を曖昧にするよりも遥かに大切であることを力説された④。　教皇は、信徒が自己の信仰にしっかりと立脚しながらも、異なる相手に対する理解と寛

容の精神を怠らないように努めることが教会一致運動の基礎であると語りかけて、両教会の信徒を励ましたかったのであろう。

ところが「信仰は政治的交渉による妥協や条約取決めのようにして決めるものではない。」という教皇の発言は直ちにプロテスタント教会、多くのカトリック信徒、マスコミ関係者の非難を浴びたのである。「教皇は教会一致を望まない。」「教皇はプロテスタント信徒を失望させた。」との大見出しが翌日の新聞を賑わせ、教皇の「不寛容」に失望したカトリック・ジャーナリストや、「人間性を無視した教条主義者」の教皇を見て泣き崩れたというカトリック信徒の女性の声などのみが紹介された。プロテスタント教会のある牧師は「離婚者に冷たく、同性愛者の結婚や共同聖餐を拒否するベネディクト 16 世は、隣人愛の精神を知らない。」として教皇を激しく弾劾した。しかし人道主義、隣人愛、寛容を口実に現代社会の全ての潮流を容認し、福音書の新解釈、読み直しなどと称してこれに歩調を合わせるドイツ福音教会（EKD)の姿勢を批判する厳格なプロテスタント教会の中には、教皇の明確な発言に賛同し、感謝の意を表明した牧師もいたのである⑤。　教会一致を求める真の対話や交流は、このような人々との間で促進されるべきであろう。

この日の午後、エアフルトで行われたミサで教皇は、ナチ・ドイツと共産主義という二つの独裁・恐怖政治を乗り越えてじっとカトリック信仰を守った信徒の勇気を誉め、これこそが現在の教会に一番求められる精神であり、宗教を単なる私事として室内に閉じ込めてはいけないことを力説された⑥。

エアフルトを後にした教皇の最後の訪問地は、フライブルクである。この町の市長（緑の党）は率直に「私は無宗教者ですが、教皇をお迎えするのは嬉しく光栄なことです。」と述べ、市民の歓迎ぶりも本当に心からのものであったようだ。しかしここでも街頭インタビューなどは、教皇批判の語を誘導するような質問のみであり、到る所で反教皇感情を煽動する報道関係者の執拗な姿が見られた。

翌 9 月 25 日の最終日にフライブルク郊外で行なわれた野外ミサには約 100.000 人が集まり、筆者の属するリンブルク司教区からは 1000 人余りがここに参加した。

バスは朝 3 時 30 分に発車、夜中 12 時過ぎにフランクフルト帰着という強行スケジュールであったが、やはり現場で司教の出迎えを受け、大勢の人々と共に教皇を迎える喜びと興奮は、テレビなどでは絶対に味わえない格別な感覚であった。

ミサの後、教皇はカトリック中央委員会（ZdK）の代表者に会い、ドイツ社会の再キリスト教化と教会の刷新のために大切なのは信仰の刷新であり、安直な擬似改革（司祭の結婚許可、女性司祭容認など）ではないこと、偏狭な国民根性に彩られた教会ではなく世界教会の一員としての自覚を強めるように促された⑦。「いつまで世間に迎合して快適な社会に甘んじようとするのか。」という教皇の警告は左傾信徒には大いに耳の痛い発言であっただろう。

ミサの後、教皇はフライブルクのコンサート会場で政治家、教会関係者などの前で、教会は社会的な特権や地位などをあてにせず、世俗社会と一線を引きながらもここに灯火を照らさなければ、ドイツの再福音は無理であることを言明された⑧。

4 日間の強行プログラムを無事に終えた教皇は、この会場から直接に飛行場に向かい、心配されていた不祥事もなく無事にローマに戻られた。教皇のドイツ滞在中、多くの信徒が教皇の深い信仰から滲み出た説教、理路整然として説得力のある講話、確信に満ちた態度に感銘を受け、大いに鼓舞されたことは確実である。また教皇に関するマスコミ報道の歪曲、偏向ぶりに気付いた人々も多かったであろう。いかなる非難、攻撃にも臆することなくゆとりある態度で各所に立たれた教皇の姿は、
やはり信仰の成せる業であることを深く再認識した 4 日間であった。

しかし最初に述べた通り、この 4 日間を総括した論評の大半は極めて辛辣であった。「教皇は教会の民主化を求める信徒の声を無視した。」、「教皇は所詮、頑固なラッツインガー教授に過ぎなかった。」、「過去の遺物が化石のような説教をしにやって来た。」などの類いで、教皇の訪問を心底から喜んだ司祭や信徒の心を踏みにじるような記事が目立った。教皇が必死に呼びかけた「神への回帰」などは、進歩主義者と称するマスコミ関係者や一

般世間、或いは左傾カトリック信徒の諸団体にとって単なるお笑いでしかなかったのだろうか。「信仰は政治的な交渉のようにして取決めるものではない。」という教皇の言葉は宗教者として当然の発言であるが、これに激昂したプロテスタント信徒や少なからずのカトリック信徒、そしてマスコミ陣の姿は、相対主義こそ寛容精神の表れと見做す現代ドイツの精神風土を如実に表す鏡ではないかと思わざるをえない。社会の動向と時流に絶対の尺度を置き、これに逆らう者を排除、攻撃する気風が教会内にまで深く巣食っていることに心を痛め、真の信仰刷新とドイツ社会の再キリスト教化を願って来独された教皇の意図が理解されなかったのは、残念な限りであった。

教皇はマスコミ陣が非難するように「現代社会に背を向けた頑固者」ではなく、非キリスト教化が急激に進み、さらには正統な教会とは相容れない要求ばかりが先行している母国ドイツの現状を熟知しているからこそ、将来への道を誤らないようにという強い勧告を遺言のようにして残したのではないだろうか。母国の教会の将来を案ずる教皇の声は、今こそ少数者として地の塩となる自覚を持つようにという強い呼びかけだったのである。真面目な信徒は、キリスト教徒が何の弾圧も束縛もない社会で信仰の自由を享受したり、或いは好き勝手な批判や要求を教会に叩きつけるような自由までも謳歌していた時代は既に過去となり、世俗化と脱キリスト教化の波で急増する教会攻撃、批判、偏見など様々な困難に直面する時代に突入していることに気付かなければいけない。教皇のドイツ訪問はこれが最後であろう、と予測する人は多い。統計上の数字に甘んじたり、歪んだ教会報道や世論に惑わされることなく、教会の威信回復と真の再生のために最大限の努力をするのは、信徒に与えられた緊急課題であろう。せっかくの教皇訪問を無駄にしてはならない。

9月27日付き Frankfurter Allgemeine 紙は、教皇の訪問に大いに感謝の意と感激を表明した司教の一人として、冒頭に挙げたリンブルク司教を紹介したが、「諸司教も本心ではこの教皇を好いていないはずであるが、心理的な強制と抑圧のもとで言いたくもない発言をしたのであろう。」という意地悪い推測をした。しかし筆者はこの司教が日頃、教会内の左傾造反信徒等の圧力に必死で

抵抗していることを見聞しているので、その発言は心から率直に述べたものだと信じている。

① http://www.derwesten.de/nachrichten/SPD-Fraktion-weist-Aufruf-zu-Papst-Boykott-zurueck-id4804935.html}
http://www.heute.de/ZDFheute/inhalt/8/0,3672,8247880,00.html

② 教皇の議会演説：9 月 23 日付 Frankfurter Allgemeine 紙及び
http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=522684

③ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=522726

④ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/articolo.asp?c=522928

⑤ 10 月 4 日付き Frankfurter Allgemeine 紙及び
http://www.kath.net/detail.php?id=33271

⑥ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/articolo.asp?c=523193

⑦ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/articolo.asp?c=523303
http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=523421

⑧ http://www.oecumene.radiovaticana.org/ted/Articolo.asp?c=523543